

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	答客門（承前）：論説
Author(s)	内田，周平
Citation	龍南會雜誌， 5 5： 1 - 6
Issue date	1897-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4796
Right	

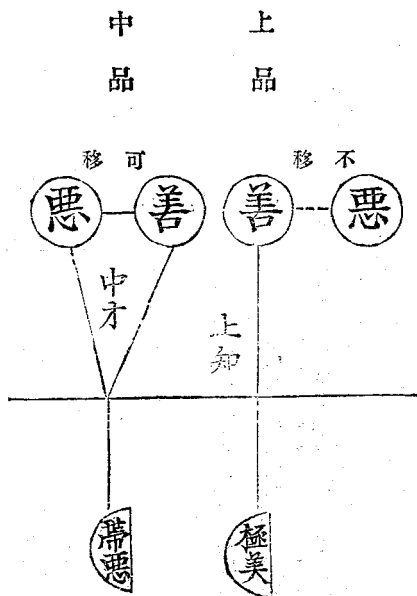
龍南會雜誌第五拾五號

論說

答客問 (承前)

教授 内田周平

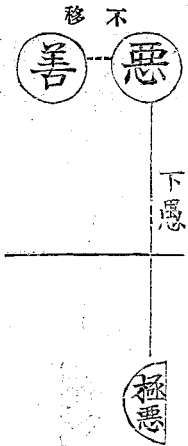
客曰く足下前に上知下愚は人の性と看すして人の品と看よと曰はれしがこの上知下愚の間に位する中才を合すれば人に三品ありと謂ふべしこの三品の人その性相近と謂ふを得べきや
余曰く謂ふを得べし之を圖解にすれば左の如し



習(外界)

性(内界)單以氣實言

下 品



氣質の性は此の如く極美、帶惡、極惡の差ありてこれを相近と謂ふべからず然れども性相近の性は集註に所謂本然之性兼氣質而言者なればこの氣質に加ふるにその主本たる本然を以てするときは即ち左の如し(退補氣質の性と雖も姑らく中品のみを言へば亦相近と謂ふを得べし)

人

其性本然兼氣質言

上 品



即



中 品



即



下 品



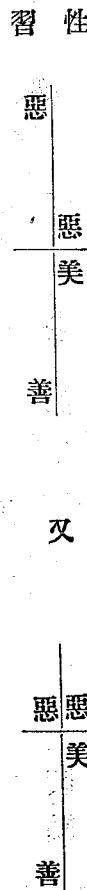
即



近 相

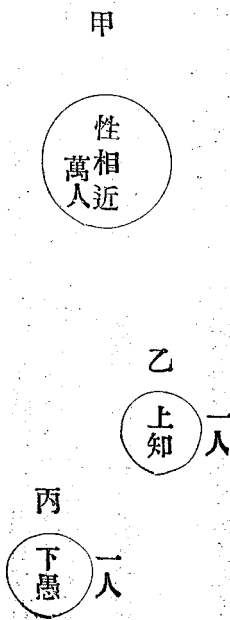
右の如く三品共に氣質え本然を加ふれば相近となるべし故に人の品格はその行爲の良否に因て上中の不齊あれども性の休質に至りては氷炭の甚異なるが如きに非ず即ち三品の人同じく其性の善なる者を有すれば之を相近と謂ふ亦宜べならずや上知下愚の人と雖もその性は固より相近の性なり客曰く習相遠に就ても從來解釋を誤りし者ある如く足下は言へりこれ亦圖解にして示さるゝことを得るや

余曰く左の如く見れば誤解なり



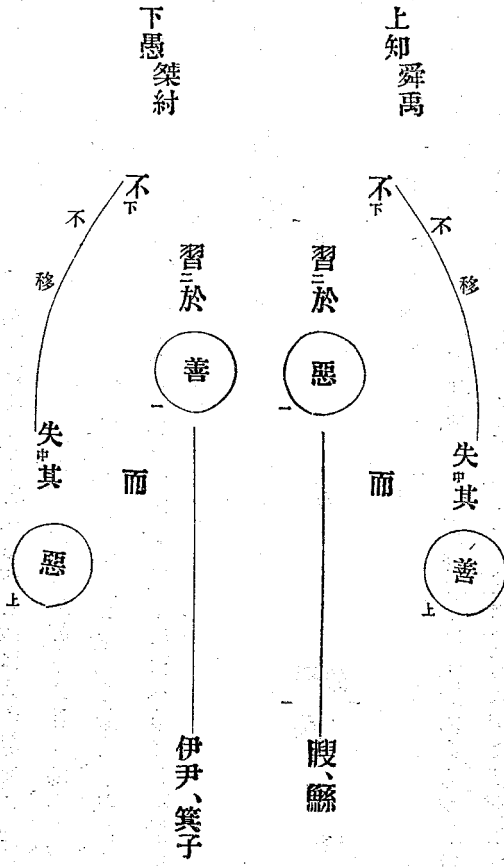
客曰く唯上知與下愚不移と唯の字の意如何

余曰くこの小學校令は全國に行はむ唯沖繩と北海道とは此限にあらず唯の字の意譬へば此の如し全國中に特別なる法令を奉ずる沖繩と北海道とあるは猶ほ萬人中に特別なる品行を有する上知と下愚とあるがごとし沖繩北海道固より言文を略ぼ同ふする全國中の一部分にして上知下愚も亦性質を相近くする萬人中の一部分なり之を圖解すれば左の如し



乙丙圖の一人は共に甲圖の萬人中より特に分け出して言ひしもの萬人の外に於て別に上知下愚の二人あるに非ず但だ甲圖は性を以て言ひ未だ習に入らず乙丙圖は人を以て言ひ己に習に入しものなり客曰く貴説の如く上知下愚は性を謂ふ者に非ずとすれば不移は何物が移らざるにや請ふ之れを教示せよ

余曰く大略に之を言へば上知下愚は君子小人と云ふ如く人の品と看る即ち其人が移らざるなり然れども上知不移をば堯舜の如き者は桀紂の如き者とならずと解し下愚不移をば桀紂の如き者は堯舜の如き者とならずと解せば甚だ漠然たるを免れず又圖解を以て之を示さん



桀紂の如き氣質昏濁なる者も自ら克治することを爲せば堯舜の如き人ともなるべし然れども桀紂は下愚の人にして自ら克治することを肯てせず故に不移と曰ふなり程子は語其性則皆善也語其才則有下愚之不移と曰ひ上知下愚をば才と謂ふて性と謂はず朱子は相近の處に性兼氣質と註し不移の處には單に人之氣質と註して性の字を補言せず又美惡一定と謂ふて善惡の字を用ひず其意の在る所を知るべし試に朱子の註語を内外兩界に區分すれば左の如し

内界

外界

人之氣質相近之中

又有美惡一定而

非習之所能移者

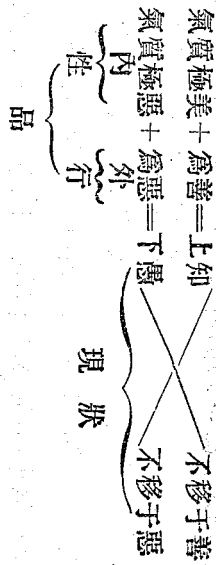
この意を解すれば曰く人の氣質は其美中滯惡の比例七分三分なる者あり六分四分なる者あり五分五分なる者ありその差相遠からざること大概此の如し然れどもこれ大概に言ひし者にて精しく之を言へば千萬人の中には又一二人特別に全体美なる者と全体惡なる者とあり此れは習俗を以てするも容易に移改すること能はずと之を數學的に表示すれば左の如し

上品＝美一分十不美

下品＝強一分十不強

又語類に一條これが参考となるべき者あり曰く人之氣質、實有如是者、如何說得變得、所以之謂下愚、而其所以至此下愚者、是怎生、便是氣質之性、とこの語を觀れば下愚は其行爲の現狀に就て言へり朱子も亦下愚を人の品と看たるなり然れどもこの品を成すの原因は氣質之性に在りとすれば余

は更にこの品字の意義を内外兩界に擴張して性行を兼ね包む者と曰はん而してこの性は固より本然の謂に非ずこれに不移の義を加へて圖說すれば左の如し



(未完)

大村産眞珠貝 *Avicula margaritifera* (Ommurane) に就て (承前)

澁江富貴三

珠母の構造

1. 介 殼

殼はカラスガヒとハマグリの間位に位すべき強硬の度を有し較々方形をなし四曲の度甚だしからず其の實質は明らかに區別すべき内外二層より成り頗ぶる硬固に織成せらる内外二層の間には所謂 Prismenschicht とて柱狀に組織せる磷酸石灰の一層あるべけれど別に一層として認むべき程に著くもあらず左に各層に就て簡單なる記述をなすべし

外層は其組成上より雲母層組織と假名を付したり薄き鱗片の重疊せるものなるが故に其性柔軟にし